

ジャーナリスト
元ジャパンタイムズ執行役員

大門小百合さんはジャパンタイムズ報道部長時代、公私とも区別がつかないほど猛烈に忙しい日々を過ごした。一生懸命にやっているのに、仕事も駄目。子育ても駄目。やること全てが中途半端に思え、罪悪感を覚えるほどだった。が、そんなある日、部下からランチに誘われる。つきり辞職願でも出されるのかと思いきや、「もつ、一人で頑張らなくてください。私たちがやりますから、仕事を振ってください」。うれしかった。半面、それほど私は髪を振り乱してやっていたのかなとも思った。頑張りすぎないこと、困ったためらわず、まわりに支えてもらうことを部下に教わった。好きな言葉は「上善水の如し」。形のない水はどんな器にも入るし、相手に合わせられる。川上から流れてゆく間にいろいろな養分を取り込み、最後は川下の土地に返して豊かにする。自分もかくありたい。大門さんは、これまで出会った人からいただいた養分をより多くの人に返せるように努力を続けたいと考えている。

大門小百合

日本の良さを強さとして、 若者が世界で活躍するようになり、 日本を発展させる

日本最古の英字新聞であるジャパンタイムズ。120年を超える同紙の歴史で、大門小百合氏は女性として初めて編集最高責任者を務めた。報道部長時代に「3・11」を経験。地震、津波、放射能に襲われる中、スタッフの協力を得ながら外国人が必
要とする情報を発信しつづける一方、深夜に帰宅すると母親として愛娘の小学校入学の準備をしたという。長らく政治と
経済分野を担当してきた大門氏に、日本が直面しているさまざまな課題の原因と解決のヒントを伺った。

英字新聞社の報道部に入社 留学、出産を経て報道部長に

伊藤 大門さんは英字新聞「ジャパンタイムズ」社の編集局長、論説委員を経て2020年9月に独立、現在はジャーナリストとして活躍されています。まずはこれまでの道のりから伺えますでしょうか。

大門 私は1991年ジャパンタイムズの報道部に記者として入りまして、最初は政治と経済を担当していました。高校のときにアメリカに留学し、上智大学の外国語学部に進みまして、英語そのものは学んではいましたが、入社したての

頃は、デスクに原稿を提出すると、原型をとどめないくらい赤字を入れられました。そのため毎日、会社を辞めようか、仕事が合っていないんじゃないかと思っていました。そんなことを思いつつやっていたのですが、入社から約10年後の2000年、ハーバード大学の「ニーマンフェローシップ」の特別研究員として招聘されました。それは全米の記者12人、海外の記者12人が呼ばれて行われるジャーナリストのミッドキャリアプログラムで、ある程度経験を積んだジャーナリストと一緒に勉強させるものです。そこで1年間留学する機会をいただき、ジャーナリズムやアメリカ政治について研究しました。

た。その後の2004年には出産をして、約1年間育児休業に入りました。ちょうどその間にジャーナリストである私の夫がサウジアラビアの研究所から呼ばれました。たまたま私もジャーナリストだと分かると先方が「ぜひ奥さんと一緒にジャーナリストとして研究員になってくれ」と言ってくださったのです。当時のサウジアラビアには観光ビザがなく、メッカがある国なのでイスラム教徒には巡礼ビザを出しますが、私はイスラム教徒ではありません。つまり普通は行けない国なんです。でもジャーナリストはできないと言われると、やりたくなるんです。いろいろな人に反対されましたが、休業中に夫と娘と3人で行き